2018年1月7日(日) マルコ1:4-11

洗礼者ヨハネがラクダの毛衣を着て、腰に皮の帯、食べ物はイナゴに野蜜という生活ぶりは現代から見れば異様、当時の人々から見ても変り種だったかもしれないが、荒れ野で質素に生きて、人々から尊敬される宗教指導者という感覚は多いにあったのかと思う。主に従い派遣されていくときに財布も履物も杖も袋も持たずに行きなさいとあったが、現代にも派遣されるものが本当に必要なものだけを携えて派遣される準備をしたい。

2018年1月8日(月) ローマ4:1-12

ローマ3章28節にルター派教会において、また多くのプロテスタント教会において有名な「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考える」という箇所があった上で、さらに4章にはいって、「不信人な者を義とされる方」という言葉が出てきている。これらの言葉の意味は深い。パウロ流の難しい言い回しなのかもしれないが、主なるイエスの存在がどういう信仰の持ち主なのか、そしてそのお方を信じることとはどういうことなのか？徹底的な赦し・恵みの源泉のような方で、私たちもそこに浸り、その恵みに基づいて行動できますように。

2018年1月12日(金)　士師記2:16-23

ユダヤ教の歴史において、モーセの後継者であるヨシュアが死んだあと、主に背く指導者たちが出てきてとんでもない世代になっていった歴史がある。　私はこの箇所を読んでいて、ローマ教会が11世紀に正教会から決別し、ローマカトリック-Roman Cathoric と呼ばれるようになったが、”cathoric” という ”万人に共通な” という本来の意味からは異なるとんでもない指導者たちによって変遷していったことと重なるように感じている。しかし、もちろん「不信人なものを義とされるお方」によって、何百年もかかったが道が正されていったことを覚える。ユダヤ教においても同じだったのかと感じる。

2018年1月14日(日) ヨハネ1:43-51

ナタナエルという人物、最初はイエスのことを「ナザレから良いものが出るだろうか」といい、自分の先入観によって、無視しようとする態度があった。しかし、心の奥底には、ひょっとしてこの人はすごい人かもしれないという気持ちは1パーセント位はあったのかと思う。そして、”Come and See”というフィリポについていきイエスに会い、目からうろこのような体験をする。　現代においても「教会なんて」と思い遠ざかっている人の中に、ナタナエルと同じ経験をする人がいることを覚える。”Come and See”に相当する言葉を語りかけ、みなさんが復活ルーテル教会に誘って欲しい。私はこれから数年は日本に行くことになったが、主なるイエスキリストがハンテントンビーチ復活ルーテルにもずっと居続けてくださる。

主の恵みと平安

安達均